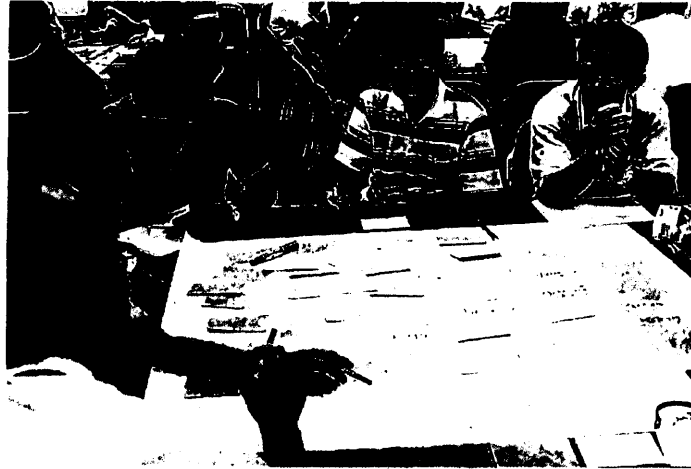


# 高台移転「将来像を」

沼津・内浦  
重須地区  
住民がワークショップ



地域の現状や将来像を話し合う住民＝沼津市の重須公民館

津波に備えて高台への集団移転を目指している沼津市の内浦重須自治会（原敏会長）は11日夜、同市の重須公民館で勉強会を開いた。講師を務める北海道大学院の森傑教授が「未来に伝えたい内浦重須の宝」と題してワークショップを開き、住民39人が地域の現状や将来像を見つめ直した。

域の長所短所▽10年後の地域▽30年後はどうなっていてほしいか―について話し合った。交通網や医療、商業施設といったインフラ面の乏しさに問題意識を持つ住民が多かった。将来に向けては、「エネルギーの自給自足ができる生活をしたい」「農業、漁業の後継者を育てたい」「都心から人を呼べるまちにしたい」などの意見が挙がった。

森教授は「地域の目標によって防災の手段は変わる。計画を立てるためには将来像を明確にすることが重要」と述べた。その上で、国の防災集団移転促進事業について「居住区だけに限る事業であり、医療施設などは対象にならない。集団移転に過度な期待をせず、ハード、ソフト両面を一緒に考えていかないといけない」とアドバイスした。

同地区は内閣府が公表した南海トラフ巨大地震の津波高が約9メートルと想定された。県の第3次被害想定で示された10・4メートルより低いが、原自治会長は「安心はしていない。高台移転を目指して課題と向き合っていくことに変わりはない」と話した。